ビル・リードと先住民芸術の再評価

上　原　一　明

Bill Reid and Reassess of First Nation Art

UEHARA Kazuaki

(Received September 30, 2011)

はじめに

本論は、カナダを代表する彫刻家ビル・リードによる先住民伝統芸術の復興と、国家的文化の独自性としての採用について述べる。更に台湾の先住民芸術の現在を取り挙げ、両者の先住民芸術の再評価を考察する。英文題目の First Nation とは先住民族を指し、アメリカ・インディアンという呼称を現代的に表わした英語表記である。

1．ビル・リードによる先住民族文化の復興と国家的シンボル

ビル（ウィリアム・ロナルド）・リードは、父親をスコットランド・ドイツ系アメリカ人（ウィリアム・リード）、母親をクイーンズ・シャーロット島の先住民族ハイダ族（ソフィ・グラッドストン）として、1920年カナダのブリティッシュ・コロンビア州ビクトリアに生まれた。幼少の頃は白人社会の中で教育された。父親のウィリアムはホテルを経営するため北の境界を旅するが、結果的にはうまくいかず、1932年に家族から去ってしまう。その間、母親のソフィは得意の裁縫で家族を養った。10代半ばまでハイダ族の伝統文化を知らなかったビルは、母方の祖父チャールズ・グラッドストンと時間を過ごした。宝石商を営む祖父の紹介により、ハイダ族の彫刻家で彼のおじであるチャールズ・エデンショウや、職人の元で技術を学んだ。

この時の事を彼は、1982年のCBSラジオのインタビューでこう語っている。

「それまで私には全くインディアン世界の経験がありませんでした。しかし、彼らは生まれた時からスキッドゲイト（クイーンシャーロット諸島のハイダ族村）で生きる誰もがハイダの伝統文化を知っていました。しかし、ヴィクトリアで生まれ育った私は知りませんでした。それは母が、これから生きていくには、多くのイギリス人が住む場所で暮らすのが良い、と思ったからです。私は、彼女は生涯熱心な英国贔屓であったと思いました。」

これは、当時の白人を中心とした社会における先住民族の状況を表している。そしてこれは白人を夫に持った母親の選択であり、彼はそれを客観的に指摘している。その中で彼は母親の意向で白人社会の中で教育を受けてきたからこそ、自らのルーツであるハイダ族の神話と造形芸術の独自性と文化の継承の必要性を痛感したのである。しかし文化の継承は、その民族の生活形態そのものが維持されない限り困難である。トーテム・ポールにおいても、材質が木である以上、野外設置においては耐久性に限界があるため、いずれは朽ちてしまう。ハイダ族にしては朽ちて消滅すること自体さほど重要視していない。部族の繁栄を象徴する意味において、

むしろ常に新しいものを作り続けることを望んでいた。しかし近代化が進む中、彼の故郷の文化の継承はその本来の生活形態の変化と同時に困難なものとなっていく。

むしろビル・リードは、ハイダ族の芸術文化の継承を近代的造形表現という新しい手法で昇華させている。代表作のひとつに数えられているのが「ワタリガラスと最初の人類　The Raven and the First Men」（ブリティッシュ・コロンビア大学附属人類学博物館収蔵）である。（図１、図２）

「ワタリガラスと最初の人類」は、ハイダ族の伝説による人間の創造の物語を表している。ワタリガラスが、ハイダ族のグワイ（クイーン・シャーロット諸島）で、自分は孤独であることに気づいた。ある日、彼は異常に巨大なハマグリの貝殻を発見した。それには何人かの小さな人間が突き出ていた。ワタリガラスは、貝殻の中に入っている彼らを自分の素晴らしい世界に加えるために説得した。何人かの人間は最初はためらったが、やがて彼らは好奇心を持ち、ついに最初のハイダ族になるために少し開いた巨大な貝殻から出てきた。（注１）

このハイダ族の伝説の状況を表した作品は、1970年に７cm立方の小品（The Raven Discovering Mankind in a Clamshell）として制作されたのち、1980年に２m立方の巨大な作品（The Raven and the First Men）として完成させている。それはハイダ族伝統の木彫様式を従来のシンメトリックな造形から、動きのあるものへと変化させている。そしてトーテム・ポールにみられる原木の円柱状の形の制約を意識しない、集成材による自由な造形方法として制作されていることにおいて、ファースト・ネイション・アートをより高い次元に押し上げている。原木の要素をそのまま活用し造形する先住民の自然（＝原木）への敬意に対して、ビル・リードのあえてこのようなことに囚われない造形方法は、白人社会で教育を受けた西洋的美意識を獲得したことによるものである。

そしてビル・リードはハイダ族の芸術性の高さを示すため、西洋中心の世論と対峙することに人生を費やした。彼はハイダ族とヨーロッパの混血であったため、彼の芸術作品はハイダ族芸術のルネッサンスを示唆するものと思われた。そして世間では、２つの異なる世界を通して展開したアーティストとして、リードを好奇心の対象として見るようになった。しかし一部では彼に冷笑的な目を向け、ハイダ族の伝統芸術を模倣した彫刻家だとして彼を非難した。

しかし、結果的に彼の生み出す彫刻作品は広くカナダ社会に受け入れられた。彼の代表作である「ワタリガラスと最初の人類」と「ハイダ・グワイの精神」が、20カナダ・ドル紙幣に採用されていることが何よりこれを証明している。国家の特色とは、そこに住む歴史的な民族的社会構造による文化形成である。現在、カナダ国家を統治しているのはイギリス・フランス系の白人であるが、その文化の源流はヨーロッパにある。北米カナダのカナダたる独自の文化とは、先住民族文化であり、その上に成り立っているのが欧州文化である。その両方の要素を兼ね備えた芸術家が、ビル・リードなのである。彼の作品は先住民族ハイダの伝統芸術をヨーロッパ的美意識と融合させたものとして、カナダを代表する芸術家として、国家的シンボルとして冠されている。主なパブリック・アートとしては、バンクーバー国際空港の「ハイダ・グワイの精神、ジェード・カヌー」や、バンクーバー水族館の「海底世界のチーフ」等カナダ国内に多くの作品が設置されている。

ビル・リード以後も、スーザン・ポイントをはじめとする先住民族出身の彫刻家が活躍している。更に、クイーン・シャーロット諸島の黒色の珪質粘土岩を使用した、新たな先住民芸術の彫刻も様々なスタイルの作品が盛んに制作されている。

2、台湾における先住民芸術の復興

2009年に筆者が参加した国際木彫芸術シンポジウムの参加作家の一人に、現在注目されている台湾先住民出身の彫刻家の参加があった。パイワン族のニーダン・ダッゲイバーリィ(尼誕・達給伐歴）である。パイワン族は台湾南部の先住民族で、木彫芸術を得意とする独自の文化を持っている。木本来の材質感を前面に打ち出した素朴で大胆な彫刻は、南方系の造形様式であり呪術的である。本来は生活環境の中にこれらの木彫を配し、お守りとしている。

国際木彫芸術シンポジウムにおけるダッゲイバーリィの彫刻作品は、パイワン族の神話の中に登場する鷹をモチーフにしている。(図３） 自らの部族を守る為に鷹となった老人の神話である。象形的なその造形は、パイワン族伝統の様式を更に現代風にアレンジしており、正面性と側面性を交差させている。基本的にシンメトリックな要素を保持しているのは、先住民芸術表現の象徴主義を受け継いでいるからなのであろう。彼自ら「私は先住民なので、何を作っても先住民の作品になる。」と語っている通り、先住民族としての自分の造形感覚を素直に作品化している。

近年、台湾における先住民出身芸術家の活躍の場が増加している背景には、台湾の先住民に対する地位改善と、台湾政府の国家戦略的台湾文化の新たな構築という要素が伺える。300年ほど前より、福建省や広東省等中国大陸から移住してきた中華系の人々による台湾の文化形成は、日本統治時代を経た後、中国大陸とは異なる多様な文化を成立させている。更に1990年代後半から民主化が進むと同時に、人々の間には「新台湾人」という新しい概念が広まっていった。そこで注目を集めたのが台湾先住民族の芸術世界なのである。それは台湾が世界に誇る唯一無二の芸術世界であると同時に、民主化による新しい台湾社会のひとつの象徴とも言えるものである。行政側は、「先住民木彫コンテスト」や「先住民芸術創作コンテスト」等コンペティションの開催や先住民テーマ・パークの造営を機に、先住民芸術の復興と発展を後押ししている。更には国外におけるタイワン・アートとしての展開をも模索しており、台湾文化の新たな一翼を担うべく活発化している。

3．先住民芸術の再評価

20世紀初頭、西洋美術界の第一線で活躍していたピカソやマティス、モディリアーニらによるアフリカン・アートに影響された作品制作は、新たな美的概念として衝撃を持って受け入れられた。歴史的な巨大国家形成の中で、国の権力誇示と多くの国民を統治・教育する目的の為に形成されてきた宗教・思想を中心に発展してきた国家美術から、純粋な表現美術として、アフリカン・アートにみられる大自然と人間精神との霊的直感性による造形に、その新しい価値観を求めたのである。

先住民芸術とは、当該国が形成される以前からその地域に住んでいる民族が創り上げた芸術のことを指すため、直接アフリカン・アートはそれに該当しないが、自然信仰という意味における部族単位の造形様式、という大きな枠組においては同一のものと考えられる。両者における再評価は、置かれた状況による差異こそあるが、多様な民族による固有の芸術価値の評価という観点で共通する。

カナダにおけるビル・リードの先住民芸術の復興活動と、国家の文化的シンボルとしての採用、そして台湾における先住民アーティストの育成と国際的展開をみるにあたり、各地域に根

ざした芸術活動が、社会や国家形成に大きな価値を提供している、ということを認識させる。そこで必然的に発生した造形感覚と様式は、そこで生活する人々の精神的な造形の表出であると同時に、そこに生活する人々にとって精神の拠り所となるのである。

先住民芸術の今日的価値とは、人間の既存の社会構造に対する優位性の理念に対する、新たな価値の構築を提供することであるといえる。そして、それは既存の社会構造をより豊かにするものでもある。文化とはこのように形成されていくものである。

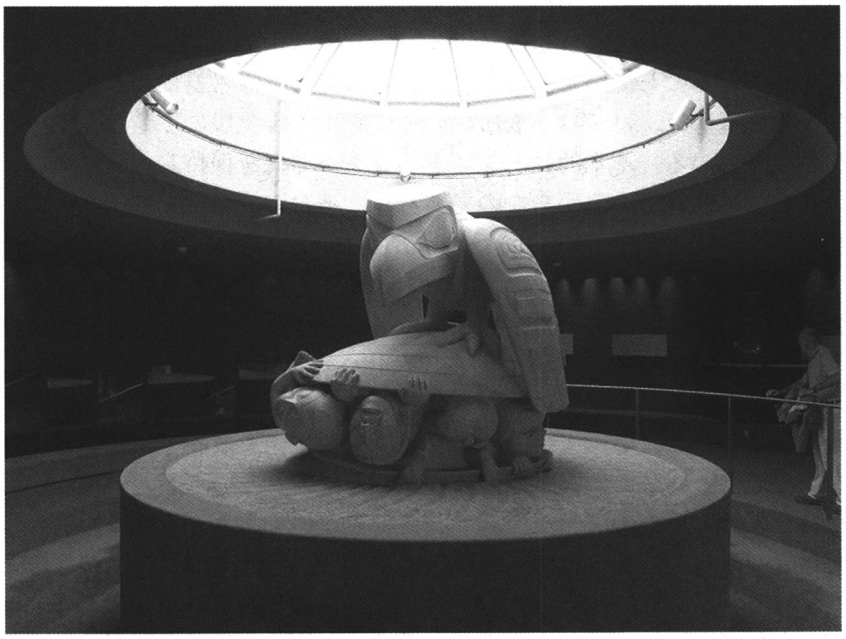

図１　「ワタリガラスと最初の人類」（筆者撮影）

図２　「ワタリガラスと最初の人類」背面（筆者撮影）

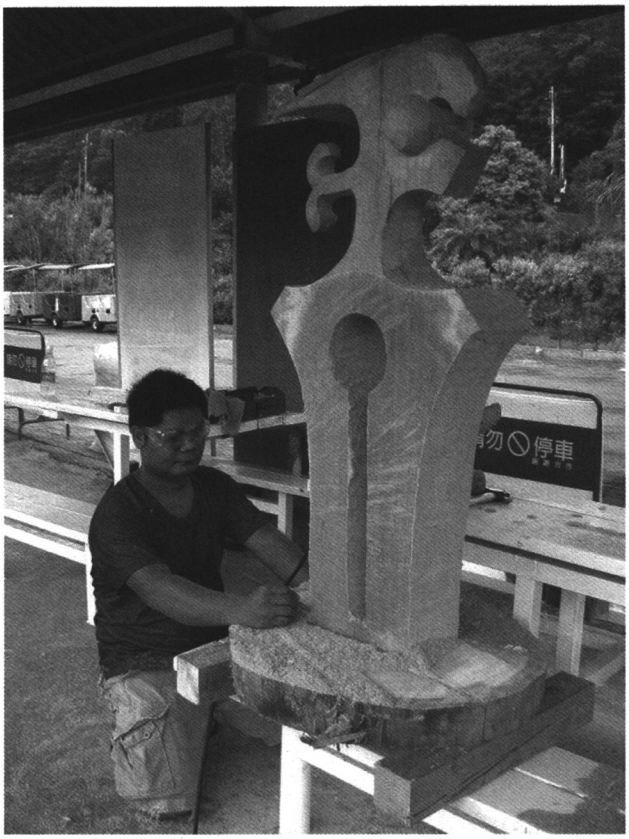

図３　制作中のニーダン・ダッゲイバーリィ（筆者撮影）

注

本研究は平成22年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号22520138　代表者：中野良寿）による分担者としての研究の一部である。

注１）ビル・リード基金会より抜粋

参考文献：

・BILL REID　Doris Shadbolt　Douglass & Mclntyre Ltd. 2003
・The Museum of Anthrogology at the University of British Columbia
　Edited by Carol E.Mayer and Anthony Shelton　Douglass & Mclntyre Ltd.2009
・Brething Stone　Contemporary Haida Argillite Sculpture　Carol Sheehan
　Alberta Foundation for the Arts 2008
・CBS Digital Archives "The Life and Legend of Bill Reid"
　http://archives.cbc.ca/arts_entertainment/sculpture/topics/1273/
・Bill Reid Foundation
　http://www.billreidfoundation.org/banknote/raven.ht
・Daki　http://takivalit.blogspot.com/